

はん じゅう しん
半獣神

夢枕 獏



Mura Gami

はんじゆうしん
半獣神

ゆめまくらばく
夢枕獏



角川文庫 6579

昭和六十一年十月二十五日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二丁目十三番一

電話 編集部(〇三)二三八—八四五—

営業部(〇三)二三八—八五二—

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——多摩文庫

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

はんじゅうしん
半獣神

夢枕獏



角川文庫 6579

それは、獣^{けもの}ではなかった。神でもなかった。それは、雷鳴と暗雲と共に、混沌^{こんとん}の中から生まれた輪廻^{りんね}の蛇^{へび}である。涅槃^{ねはん}にたどりつくために、自分の尾^おを捜^{さが}して自らの内部に潜^{もぐ}り込んでゆく螺旋^{らせん}である。もつれた螺旋^{らせん}の花。歪^{いびつ}な白蓮^{はくれん}。オウム貝。その螺旋^{らせん}の奥^{おく}に彼は眠^{ねむ}っている。眠りながら、人^あで在る夢^{ゆめ}を見ている。獣であり神であり、人^あで在るところの螺旋^{らせん}の夢を見ている。

目次

キマイラ神話変序曲 9

秋夜幻想 32

木より降りて告げよ 37

雪あかりの人 42

雪の夜 45

餓鬼魂 50

だっくんぼうれん 68

愛しの君はにきび 88

自分を食った話	110
雨女 あめおんな の物語	123
地球ですか	126
ぼくが いい子になったお話	129
会 話	133
釣 つ りの好き す な父とくろんぼあめの話	135
頭怪大学興亡史 とうかいだいがくこうぼうし	141
あとがき	181
解 説	186

キマイラ神話変 序曲

1

見わたす限りの荒野であつた。

巨大な岩石が、無数に転がっている。

乾いた土に、半分以上潜り込んでいる岩石もあれば、危ういバランスで、やっと倒れずにいるような岩石もあつた。

空は、蒼黒く、どろどろと暗雲が渦を巻いている。暗いが、荒野全体は不思議とよく見えている。しかし、夜であるのか、昼であるのか、その見当がつかない。

その荒野の底を、風が吹いている。

瘴気が、長い歳月に渡って、この土地をおおっていたのか、所々に生えている木立は、全て立ち枯れている。処どころに、まだ生きている樹があるが、それは、本来の姿とはおそろしくかけ離れたものになっている。

瘤^{こぶ}でできたような樹。

人の肌^{はだ}のように柔^{やわ}らかな樹。いや、肌というよりは、肉がそのまま樹の形状をしているのである。

獣毛^{じゅうもう}の生えている樹もあった。

梢^{こずえ}には、葉のかわりに、いびつな黒い虫が生え、風が吹^ふく度^{たび}に、もぞもぞと不気味な動きをする。

荒野^{こうや}に、風が吹く。

次第^{しだい}に強さを増^ましてゆく風の中を、ふたりの男が歩いていた。

ひとり、巨大^{きょだい}な体軀^{たいく}をした男であった。身長は一九〇センチを越^こえていそうだった。周囲に転がっている岩よりも、重量感がありそうであった。肩^{かた}の筋肉^{きんにく}が、岩のように盛^もりあがっている。

太い首の上に、ごつい頭が乗っている。

身にまとっている服がすっかりちぎれ、ぼろくずのようにしか見えなかった。肌が、半分以上も露出^{ろしゅつ}している。よく見れば、その布地^{ぬのじ}が、ぼろぼろになったジーンズとシャツであることが、やっとなと見てとれるくらいである。

つぐもさんぞう
九十九三歳——。

それがこの男の名前であった。

九十九は、背に、巨大な斧をかついでいた。

肩にまわした革のベルトで、その斧は背に固定されていた。九十九の歩調に合わせて、そのベルトが肩に重く食い込んでいる。

遠い眼をした男であった。

ここへたどりつくまでに、どれだけの歳月を経たのか――。

哀切な眼差しを、ただ前方に向けている。しかし、その眼の奥に、まだ燃えているものがあった。

長い旅の果ての荒野であった。

九十九の右横に並んで歩いているのは、老人であった。

白髪が、風になびいている。

髯までが、みごとに白い。

顔に浮いた皺が深かった。

老人も、九十九と同じように、身にまとっているものは、ぼろぼろであった。やっと服と叫ぶ程度のものである。痩せた身体をしていたが、それでも、足どりはしっかりしていた。風のように飄ひようとした身ごなしであった。

真壁雲斎である。

風が、強さを増していた。

びようびようと、獣けものの雄叫おたけびに似にた声をあげて、荒野こうやが暗い天に向かつて吠ほえている。
「たまらぬな、九十九つくもよ——」

雲斎が言った。

「瘴氣しやうきがまだ残っています」

九十九が答えた。

「呼吸こきゅうを失敗すると、はらわたから腐くされてしまうわい——」

つぶやいて、雲斎は前方に眼をやった。

雲斎の方が、九十九に比くらべて疲労ひろうの色が濃こい。

「おう——」

と、雲斎がつぶやいた。

「外法樹げほうじゆ」

と、九十九が呻うめくように言った。

前方おかの丘の上に、巨大な一本の樹きが、黒々とそびえていた。

「ついに来たか——」

雲斎が立ち止まっていた。

「待っている、大鳳おおとり……」

九十九が低くつぶやいた。

それは、三〇メートルにもなる巨大な樹であった。

いや、樹というよりは、何かの動物が、樹の形態を真似ているようである。幹をおおっているのは、木肌というよりは蒼黒い鱗のようなものであった。見る角度によって、暗い銀光を放っている。

その樹が、暗い天に向かって、ゆるく身を揺すっていた。

真直な樹ではない。

何十匹もの巨大な蛇が、もつれあいながら、地から這い出てきたような樹であった。でたらめな方向に枝が伸びている。

葉までが、蒼黒い。

その幹の途中に、人の顔があった。

人の顔の形はしているが、その表面は、鱗に似た木肌におおわれている。眼を閉じていた。

平和な表情をしていた。

半眼の菩薩像が、つい眠りに誘われて眼を閉じてしまったように見える。

「大鳳——」

九十九が、その顔を見あげてつぶやいた。
その顔は眠ったように動かない。

「やるかよ」

ぼそりと雲斎が言った。

その樹——外法樹の前に雲斎が端座した。
眼を閉じて、呼吸を整えてゆく。

雲斎の口から、低い声が洩れ出した。

——真言。

外法の因を解くマントラである。

九十九が、革のベルトをはずし、その両手に巨大な斧を握った。
——と。

ふいに、雲斎の声に誘われたように、樹の顔が眼を開いた。

鱗の下から、濡れた、澄んだ瞳が現われた。

その眼は、九十九を見、そして雲斎を見た。

「大鳳——」

と、九十九が囁くように言った。

「おれがわかるか——」

九十九が言うと、木の顔は、ひどく遠い眼つきをした。

なにか、なつかしいものを眼の前に行っているのに、それが思い出せないでいるようであった。唇が開きかけ、そして、すぐにまた閉じた。

それと同時に、再び眼が閉じられた。

「駄目か——」

九十九が、斧を手にして、樹の前に立った。

樹を見あげた。迷いを断ち切るようにその視線を落とした。

雲斎の真言に合わせて、斧を大きくふりかぶった。

その重い分厚い刃を、おもいきり樹の幹に打ち下ろした。

打ち下ろした途端に、そこから真紅の鮮血が噴き出した。

その血が、九十九にかかる。

途端に、ぞっとするような声が頭上にあがった。

あざいる！

木の顔の表情が一変していた。悪鬼の顔になっている。

かつ、と眼を開いていた。

「大鳳！」